

大会情報 ツアー体験記 メタバース編



応
般



中野匡彦 | 三菱ケミカルグループ

このたび、2023年3月2～4日に電気通信大学で開催された情報処理学会 第85回全国大会において、情報ツアー「メタバース」に参加した。本ツアーは、同全国大会において、メタバース関連の研究を聴講し、有識者の先生に解説と質疑応答をいただける企画である。僭越ながら参加者を代表してツアーの体験記を執筆させていただく。

まず筆者が本ツアーに参加した経緯を述べる。私は化学メーカーにおいて、データサイエンティストとしてデジタルビジネス変革に従事している。AIを始めとする先端技術領域に日頃から関心を持っていた。メタバースについては初学者であるため、もう一步深く入門したいと思っていた。そんな中、全国大会開催の数週間前に、たまたまSNSで本ツアーの開催案内を見つけた。案内によるとメタバースツアーのガイド役は、この分野でご高名な、東京大学先端科学技術研究センターの稲見昌彦教授とのことであった。筆者も先端技術領域に少なからずかわる者として、超感覚・超身体を始めとする稲見先生のイノベティブなご研究は存じ上げていた。業界のフロントランナーの先生から直接お話をうかがいながらメタバースの最先端の研究に入門し、メタバース業界の温度感をフォローできるのではという期待感のもと、ツアーに申し込んだ。ツアーに際しては、メタバースに関心を持つ参加者同士のネットワークも期待して臨んだ。

ツアーの参加者は全日でのべ十数名。各業界の会社員・経営者、教育・研究機関の先生、学部生、高校生の参加者までまさに老若男女が集まった。すで

に実務でメタバース、extended reality (xR)、作業支援にかかわっている方から、私のような初心者まで、メタバースに関する習熟度もさまざまであった。各人の参加動機としては、メタバースの情報収集やメタバースに対する理解を深めたいという方が多かった。中には稲見先生のファンという方もいらっ

しあった。ツアーでは、事前に指定された3つの大会セッション「xR」、「作業支援」、「xRとインタフェース」より、全19件の研究発表を各人で聴講した。各セッション終了後に小教室に集合して、稲見先生の解説をうかがい、議論を行った(図-1)。また、事務局の方には、ツアーの参加者専用のSlackチャンネルを開設いただいた。研究発表を聴講しながら、稲見先生から関連研究についてポストいただくなど、リアルタイムなやりとりも交えながらツアーは進行した。

あくまで筆者の私見に基づく分類となるが、今回



図-1 メタバースツアーにおける稲見先生の解説風景

のメタバースツアーの対象となっている講演のジャンルは、拡張現実 (AR) 7 件、仮想現実 (VR) 6 件、画像処理 3 件、その他 3 件であった。別の切り口で見ると、研究の種別として、xR 等の基盤をなす「方法論開発」に関する研究が 5 件、xR 等を特定の作業に役立てる「応用研究」が 11 件、xR 空間内での体験を「解析」する研究が 3 件あった。すなわち、本ツアーは、xR を中心に基礎から応用までバランスのとれた講演パッケージであった。

ツアーの最大の魅力は、なんといっても稲見先生による知見とユーモアに溢れる解説であった。聴講した研究発表の論旨の振り返りにとどまらず、幅広い話題をお話しくださった。たとえば、「SLAM とはどのような技術か？ メタバースの文脈でなぜ登場するのか？」など、講演の理解を補助する周辺知識を多数解説くださった。深い専門知識を持っていない参加者であっても、平易に講演内容を飲み込むことができた。また、稲見先生ならではの視点がかげがえたことも興味深かった。たとえば、「稲見先生はどこに共感したか？」という話題にはじまり、各講演と同様の研究を稲見先生が行うと仮定して、「稲見先生ならばどのような仮説を立てて、どのように検証するか？」、「稲見先生ならばどのようなシステムを実装するか？」といったアイデアまで語ってくださった。参加者からも鋭い質問やアイデアが盛んに発せられ、和やかでありながらも、インタラクティブで充実した時間を過ごすことができた。

本ツアーを通じて、最先端のメタバース関連研究に入門し、業界の温度感や、稲見先生ならではの捉え方を体験することができた。まさに、メタバース研究に関する 1 つの「バース」に没入できた。稲見先生も「知識は最大の AR」とおっしゃっていたが、

本ツアーに参加することで、1 人で参加する学会とはまた違った眺め方ができたと思う。

情処ツアーは、学会のユーザ体験を大きく強化する試みだと考える。実は、私自身はこれまで情報処理学会にゆかりがなく、全国大会の参加も今回が初めての機会であった。全国大会において並列的に多数のセッションが存在する中、「この話題をフォローしたかったら、このセッションを聴講してください」と指針をいただけたことは良いサービスであった。何より、私のような新参加者がハードルの高さを感じずに、気軽に学会の門戸を叩けることは大きな価値であると感じた。今回、情処ツアーに参加して私には大変良い勉強になった。逆に、分野外の人たちの参加に伴う学際的な交流を通じて、情報処理学会の皆さんに対して、少しでも刺激になっていれば幸いである。情処ツアーは今回初開催の企画とのことだが、今後も継続していただけたら大変嬉しい。また、学会ツアーという企画は、他分野の学会運営においても大いに参考になる仕掛けだと思う。

最後に、情処ツアーのアイデアを考案して企画までスケールさせてくださった事務局の皆さま、ツアーガイドとして素敵な解説をくださった稲見先生、一緒にツアーを盛り上げてくださった参加者の皆さま、そして素晴らしい研究発表をくださった講演者・共著者の方々に感謝を申し上げ、拙稿の結びとさせていただきます。

(2023 年 3 月 25 日受付)

中野匡彦 masahiko.nakano.ma@mccgc.com

2017 年 早稲田大学 先進理工学研究所 化学・生命化学専攻修了。博士 (理学)。現在、三菱ケミカルグループ データサイエンティスト。早稲田大学 招聘研究員を兼任。データサイエンスを軸とした化学産業のデジタルビジネス変革に従事。